

令和6年度

鹿児島県の教育

10月号



巻頭言



一般財団法人鹿児島県校長会館理事
県連合校長協会中学校長部会副部長

森園 守
鹿児島市立明和中学校長

未来の社会の創り手となる

子どもたちのために

今年の夏に開催されたパリオリンピックは、海外開催の五輪で最多の金メダルを獲得する大会となったが、勝敗に依らない多くの「幸せ」という言葉が聞かれる大会にもなった。

そんな中、女子卓球代表の早田ひな選手は、帰国記者会見で、「鹿児島の特攻資料館に行きたい。生きていること、卓球ができているのは当たり前ではないことを感じたい。」と、話した。県外の若者が、鹿児島を挙げたことに驚いたが、改めて、命の大切さや時代を超えても変わらない平和の尊さを考えさせられた。

教育には、「不易」と「流行」があると言われる。個人の尊重、自律心と責任感、他人を思いやる心、伝統や文化を大切にすることなどの豊かな人間性は、いつの時代の教育でも重要視され、大切に育んでいかなければならないものである。また、これからの時代は、一人一人が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、未来の社会の創り手になることができるよう、その資質・能力を育成していく必要がある。

「教師は、行きずりの旅人にあらず」これは、大島地区のある学校の校長室に掲げてあった言葉である。未来の社会の創り手となる子どもたちのために、学校は単に知識を伝達する場ではなく、人生や社会を見据えて学び合う場となることが求められている。私たちは、今、目の前にいる子どもたちが大人になったときの幸せを願って、そういった教育環境をつくるために、研究し続けていかなければならない。

子どもたちの夢や希望を実現し、可能性を伸ばせるか否かは、教職員の力に懸かっている。大きな影響を与えていると言える。子どもたちが「なりたい自分」に近づく力を付けるためには、「今、目の前にいる子どもたち」に必ず力を付ける」という強い覚悟を持ち、「自己研鑽」に努めていく必要がある。

校長は、教職員が、その時代にあった授業や学校教育ができるよう探究的な学びを進めるとともに、個々の力を持ち寄ってチームビルディングができる集団へと成長する環境を整えていかなければならない。そして、未来の社会の創り手が「あのとき一生懸命やったから、先生たちとの出逢いがあったから、今がある。」と、自信と誇りを持って言えることが来ることを願いたい。

令和6(2024)年 10月号

一般財団法人鹿児島県校長会館

〒890-0056 鹿児島市下荒田四丁目32-13

振替 02030-1-3192

TEL 257-9676 FAX 257-9679

(有) アート印刷

鹿児島市東坂元二丁目29-1

TEL 247-1605 FAX 247-2844

* おもな内容 *

巻頭言	1	話のひろば	13
随想	2	読書案内	15
提言	3	趣味・文芸	18
わが校の学校経営	5	郷土の紹介	19
子どもが輝く教育と	7	一般財団法人校長会館だより	20
心に残るひとこと	9	編集後記	20
ある日の校長講話	11		

表紙絵(桜島の絵) 10月号～2・3月号 前 菱田小学校 福森 真一
(現 鹿児島市教育委員会学校教育課)



随想



仕事の楽しさを実感する探求学習

株式会社九州タブチ
代表取締役社長 鶴ヶ野 未央

世の中には実に沢山の企業組織が存在しており、その業種・業態・企業文化や風土はさまざまです。そんな企業組織で働く人たちの中で「仕事の楽しさ」を実感し、生き生きと働いている人はどれだけ存在しているのだろうか・・・。大半の社会人は組織が定める規則や指示、手順や習慣に従うだけで自らの考えやアイデアを活かす機会もなく、単に「仕事をやらされている」というイメージの人が多いように思います。

VUCAの時代（先行きが不透明で将来の予測が困難な時代）において、組織に求められるニーズは複雑かつ劇的に変化しています。しかしながら、日々変化を好まない・望まない姿勢で「仕事をやらされている」人にとってはこの変化も違う世界の出来事で、どこ吹く風のように感じているに違いありません。また、そのような場所で働く人は決して明るい表情をしておらず、とても楽しんで仕事をしているように見えません。

二〇〇六年、そんなやられ感の蔓延した組織風土を主体的・自主的に変革していく目的でスタートしたのが、我社の「自主研活動」です。変化の激しい社会に対して、社員一人ひとりが自ら主体的に課題を見付け、自ら学び、自ら考え、自ら判断し、行動するといった「問題解決能力」を育成していく活動です。社員自らの意思で何かを求め、自分なりの頭でじっくりと考え、閃いたことを試し、検証し、自分なりの

答えを見付けていく、そのプロセスこそが我社独自の探求学習なのです。

自分から分けることが分かる楽しさ、できないことができるようになる喜び、浮かんできたアイデアを実践するときのワクワクする気持ち、自分の力で課題をクリアすると自分に自信が持て自分を好きになれる喜び、チームで協力して壁を乗り越えられると仲間のことでもっと好きになれる喜び。学ぶことで自らの視野が広がり、これまでとは違う世界が見えてきます。自主研活動はそんな学びそのものが持っている根源的かつ純粋な喜びを実感できる取組になっています。

また、上司や先輩は、あくまで黒子役に徹し、単に教えることはせず、あくまで社員が自ら考え、行動できるようにファシリテーターの役割を担っています。上司は実際に活動する部下に寄り添いながら、部下の活動がスムーズに進められる環境づくりに終始します。

このような自主研研究会活動の集大成ともいえるイベントが、年二回実施される「自主研発表大会」です。社内のイベントながら毎回百名程度、県内外から企業・行政・学校の方々から来社され、各職場・チームで行ってきた活動を発表します。社外の方が出席されるということもあり、内容やストーリーが誰にでも理解できるようにまとめなければなりません。発表はチーム全員で行うため、プレゼンの苦手な社員は何度も何度も練習を重ねて本番に臨みます。極

略

一九九〇年 株式会社九州タブチ入社
二〇〇二年 同社 取締役総務部長
二〇一一年 同社 代表取締役社長就任
現在に至る
二〇二三年 霧島市教育委員就任

度の緊張で言葉の出でこない社員がいると「頑張れ」と心で叫びながら、発表を終えた部下の晴れやかな姿を見て涙ぐむ上司もいたりします。そして、このイベントの最終の締めはやはり社長の役割です。活動したメンバーを心からねぎらい、気付きやアドバイスを伝えた後、後日、手作りの表彰状に表彰理由とフィードバックレポートを添えてチームに贈ります。頭書のとおり優秀な・・・の賞状や一番二番の順位付けだけでは彼らの活動を正当に評価し、次に繋がるモチベーションを創出することはできないのです。

このような活動に参画する社員の表情はいつもキラキラしています。単なるモノづくりの仕事ではなく、常に現状に問いかけ、場合によっては否定し、更なる高みを目指してチャレンジし続ける社員は「仕事の楽しさを実感」していると思います。また、上司の立場においても自らの最大の役割は部下に仕事の楽しさを教え、成長を実感させることであるということ。「使命」として認識してくれています。

「学びに終わりなし、どんなに時代が変わりどれだけ年齢を重ねても自分自身の人生を豊かなものにしたければ、一生、学び続けなさい。」高校時代の恩師の言葉です。社長になって十三年、この言葉を社員に贈り続けています。



学校における自然災害への備えについて考える

指宿小(南) 狩集 雅人

一 はじめに

六月二十日夜から二十一日未明にかけて大雨が降り、校区内外で多数の土砂崩れが発生した。とりあえず児童の登校時刻を遅らせて、職員で手分けして通学路の状況確認を行ったが、幹線道路の大規模な土砂崩れや送水管の破裂による水の噴出など、想定外の被害が報告された。

また、八月八日には日向灘を震源とする地震が発生した。その時は、九州地区小学校長協議会研究大会に出席し、那覇空港で帰りの便を待っている時であったため、慌てて学校に電話をして状況確認をしたが、幸いにも人的・物的両方とも被害はなく、学校付近での津波の到達も確認されなかったので胸をなでおろした。

自然災害はいつ何時発生するか予想するのが困難であり、想定外の結果をもたらすことも多い。学校では、安全計画や危機管理マニュアルが策定され、年度毎の見直しを行っているが、形骸化していないか、実状を踏まえたものになっているか等、改めて見直す必要性を感じた。

二 本校の取組の現状と課題

(一) 学校の立地状況

本校は、鹿児島湾まで一〇〇M、海拔二・四M、国道二二六号線とJR指宿枕崎線に挟まれた形で立地している。そのため、津波発生時は国道を渡り山手へ逃げるしかない状況にある。

(二) 防災教育の状況と課題

「児童一人一人に「自助・共助」をめざした、KYT(危機管理能力)の育成に努める。」を目標に、学年の発達の段階を踏まえた防災教育の指導を全学級で実施し、自分の命はまず自分で守る(自助)という意識付けを行い、命を守る方法として、様々な場面に応じた対処法の学習に取り組んでいる。

避難訓練についてもショート訓練を含め、年四回以上実施している。そのため、自助の意識は児童に根付いてきており、高学年になると低学年への配慮についても意識できるように なっている。共助についても実践できるようになってきている。

しかしながら、「学校から避難する」とことについては、速やかな避難ができるようになってきているが、登下校中や自宅にいる場合等については、具体的に考える場が少な

く、速やかな避難ができるかどうか疑問が残る。また、六月の大雨による土砂崩れを考えると、地震による土砂崩れにより避難経路が遮断される可能性も考えられる。その場合の安全な迂回路や短い時間での状況把握の方法についても検討しておく必要があると考える。

それから、危機管理マニュアルについては各項目ごとに作成されており、現在のものは、シンプルな流れに統一されている。確かに分かりやすくはあるが、複合災害や地震関係の新たな情報のアップデートが常になされていなければ、いざという時に使えない可能性もある。

(三) 保護者・地域との連携の状況と課題

保護者・地域の方々には、学校安全の様々な場面で協力をいただいている。スクールゾーン委員会(PTA主催)での危険箇所についての情報共有や、引き渡し訓練、地震・津波避難訓練における自治公民館長の避難誘導への協力、校区公民館主催の青少年育成の集いの防災ワークショップなど、地域全体で防災意識の高揚に努めている。これらの取組の一つ一つが繋がって、地域での普段の会話の中で防災について語られるようになると、地域の共助の意識がより強固なものになると考える。

三 おわりに

今回、自然災害への対応について改めて考えるよい機会となった。本校の課題である地震・津波災害について述べたが、豪雨災害や熱中症対策等、教育の現場で対応すべき課題は多岐に渡っている。最新の情報や地域の実情の変化に応じて、普段からの備えを充実させ、より安全な学校を目指して、取組を進めていきたい。



チーム学校を目指して

岡前小(大) 猪俣 雅 士

一 はじめに

本校は、児童数百三十八名、職員数二十名(町費含む)、通常学級六、特別支援学級三の中規模校であり、今年度から通級指導教室も開設している。新規採用、再配置の教諭が多く、チャレンジ精神が旺盛で、何事にも前向きに取り組める活気に満ちた学校である。

二 チームで取り組む学力向上

(一) 研究テーマの追究

本校は、令和五・六年度の二年間、県の研究指定を受け、「児童が自ら課題を捉え、学びに向かい続ける算数科学習の改善」個別最適な学びと協働的な学びを実現する学習モデルの開発」の研究主題の下、全職員が同じベクトルで実践を重ねている。令和七年一月二十八日の研究公開に向け、これまで四回の検証授業を積み上げてきたが、本校では授業者だけに任せず、全員が関わる「授業づくり」に重点を置いている。授業の基本的な流れを授業者が提案した後、研究推進委員会で、授業展開や教師の手立て等について検討する。その後、全職員で指導案検討を行うのだが、ここでも黒板や大型モニターを使い、模擬授業形式で意見を出し合い、授業づくりを行う。人数が増えることで、様々な意見が付け加えられ、研究の視点に沿った授業展開へと練り上げられていく。そして、検証授業へつながるのだが、当然、成果があれば課題も見られる。教師の予想と児童の思考にズレが生じることも多く、なぜ児童が混乱したのか、なぜ深まりのある協働的な学び合いにならなかったのか等、子供の事実を基に全職員で検討を行う。そして、改善策を全体で共有し、早速明日からの授業で実践する。この繰り返しである。

(二) 各種学力タイムの取組

また、検証授業だけでなく、各担任が、日常の授業においても、研究テーマを意識した実践を積み重ねている。本校はこの研究を通して、いわゆる通常型の学習展開に加え、予習型や自由進度型も取り入れている。今後更に実践を積み上げ、子供たちにとって、どの場面で、どんな学習展開が効果的であるのか、検証していきたい。

本校は、毎日十五分の帯活動として実施している学習タイム(GT)、週一回朝活動として設定しているスキルアップタイム(ST)、月に一単位時間設定しているチャレンジタイム(CT)と、三つの学力タイムを設定している。基礎・基本定着のためのGT、新聞やICTを活用するST、良問・難問に取組むCTと、それぞれに目的をもち、継続して実践している。年度当初に必ず共通理解を図り、日課表や月行事に明記することで、学級間による取組に差が生じないようにしている。

また、GTには専科や管理職も加わり、全職員で子供たちの指導に関わる体制を整えている。

三 チームで取り組む生徒指導

本校は、現在落ち着いた雰囲気ではあるが、学校生活を送らされているが、かつて、大変な時期があったのも事実である。その教訓を踏まえ、小さな変化を見逃さず、初期対応に注力している。

(一) 生徒指導連絡会

特別なことではないが、毎週二回、職員朝会后に時間を設定し、関係学年からの報告や担任以外の職員からの気付き等を全体で共有し、対応を共通理解している。この時間の設定により、担任が一人で問題を抱え込むことがなく、複数の目で子供を見ることもでき、養護教諭や生徒指導主任、管理職等、組織としての対応につながり、問題の早期発見・早期解決につながっている。

(二) 発達支持的生徒指導

何かが起こってから対応するのではなく、当たり前のことが当たり前にできているかを、常に検証していくことが大切である。靴の乱れや廊下歩行、言葉遣い等、些細な変化を見逃さず、組織として一貫した指導を心掛けていく。

四 おわりに

本校では、毎朝、「体力アップ！チャレンジかごしま」の「長縄エイトマン」に取り組んでいる。昨年度は三年生と四年生が県チャンピオンとなり、今年度は記録更新に向けて俄然やる気が増している。この取組も実は一人の教諭が始めたのをきっかけに、全校の取組として広がったものであり、決して押しつけではない。

本校の給食時間、検食のない職員は給食指導に入っている。事務職員にも給食指導のお手伝いをいただいている。大変な時期には、職員が丸とって同じ課題を共有することが欠かせない。私は校長として、先生方への感謝の気持ちをお忘れず、今後とも、やりがいのあふれる職場(学校)づくりに努めていきたい。



小規模校のよさを生かし、子ども一人一人の豊かな感性を育む学校を目指して

和田小(日) 三 善 宏 也

一 はじめに

本校区は、金峰山の北西に位置し、日置市と南さつま市との境にある堀川沿いに広がる農村地帯で、自然豊かなところである。「地域の宝」として子どもたちを地域で見守るといふ風土がある。このことは、校区公民館テーマ「ずっと住み続けたい地域を目指して、三世代仲よく、住んでよし、学んでよし、和田地区、和田小学校」にも反映されている。今年度、創立百四十五年を迎える本校は、児童数十七名、複式三学級の極小規模の学校である。

二 学校経営の方針

学校教育目標を「心身ともにたくましく、自ら考え、行動する、心豊かなひまわりっ子の育成」とし、一人一人の子どもを大事にして確かな学力や豊かな人間性、健康・体力向上など、「生きる力」を備えた子どもの育成のために、様々な教育活動に取り組んでいる。また、学校と地域が一体となった活動を通して、感謝や協力の大切さを子どもたちに学ばせている。本校は、「地域の学校」としての関心や期待が強く、この地域教育力を学校教育活動の中に連携・融合させることで、「魅

力ある学校づくり」を目指している。

三 特色ある教育活動

(一) 地域連携による教育活動の推進

本校は、モウソウ竹を使った「竹太鼓」を授業や行事に取り入れている。夏祭りや市音楽発表会、校区文化祭に向けて外部指導者に指導をしていただいている。子どもたちが「ときのまつり」や「命のはじまり」などのテーマをたて、子ども同士で話し合いながら曲づくりをしている。

このような活動を通して、地域の方々とふれあうことにより、郷土を愛し、「生きる力」を育むことができると考える。また、ひまわり竹太鼓の演奏を、地域の方々はいっしょに楽しみにしており、子どもたちから元



【ひまわり竹太鼓】

気もらい、生きがいにつながっているようである。

(二) 小中一貫教育の推進

日置市においては、「夢をもち、あしたをひらく、心豊かな人づくり」を、小中一貫教育の基本目標に掲げ、九か年を見通して、中学校区内での小中が一体となった特色ある教育活動や共通実践を行ってきている。

ア 母校貢献活動(小中交流)

中学生が卒業した小学校で、読み聞かせやいろはかるた大会、竹太鼓などの指導を行い、母校(小学校)のために活動することができている。また、小学生にとっては、中学進学に当たっての不安が軽減し、中一ギャップの解消につながっている。

イ オンライン学習(小小交流)

複式小規模校三校(永吉小、花田小、和田小)で、テレビ会議システムを活用したオンライン学習を行っている。一緒に授業を受けることで、様々な意見が飛び交い、多様な価値にふれることができている。

また、宿泊学習や修学旅行の行事前にも、オンラインで自己紹介や事前打合せを行い、活動の充実を図っている。

四 おわりに

子どもたちの心身ともに健やかな成長のために、学校・家庭・地域が連携を緊密にして、小規模校のよさを生かした和田小学校ならではの教育を、今後も進めていきたい。



気づき、考え、実行する

心身ともに豊かで健やかな生徒の育成

小宿中(大) 前泊勝利

一 はじめに

本校は、奄美市名瀬の南西部に位置し、小宿小学校と知根小学校の二校から進学してくる。校区には、奄美少年自然の家、名瀬総合運動公園、大浜海浜公園などの公共機関・施設等や、病院など医療機関が多い。豊年祭など地域行事が多く、奄美の伝統文化を大事にしている。また、「南島雑話」の著者である名越佐源太の謫居跡もある、歴史の薫り漂う校区である。

本校は、各学年二学級・特別支援学級二学級の計八学級、生徒数一五四人の学校である。「向学・集中・クリーンアップの小宿中」をキャッチフレーズに、学習や運動、ボランティア活動などに取り組んでいる。

二 学校経営の基本方針

本校の校訓は、「向学・友愛・錬磨」である。前回の勤務時に比べ、明朗で意欲的な生徒が少なくなっていると感じ、令和五年度から学校経営目標をタイトルにある「気づき、考え、実行する心身ともに豊かで健やかな生徒の育成」に変更し、「事徹底を」、「返事と気持ちよいあいさつ」として、挨拶ができ、自ら考

三 信頼される学校を

え、行動できる生徒の育成を目指している。

「信頼される学校」を目指して、学校経営の充実、安全安心な学校、特色ある教育活動の推進、教職員の資質向上、開かれた学校に取り組んでいる。その基礎となるのが、「豊かな心の育成」「健やかな体の育成」「確かな学力の定着」である。

(一) 豊かな心の育成

基本的な生活習慣と規範意識を身に付けた、思いやりがあり、道徳的実践力を備え、小宿中生としての誇りと自信を持ち、人間尊重の態度と実践力のある生徒の育成を目指して、①生徒指導の充実②心の教育の充実③道徳教育・特別活動の充実④人権同和教育の推進⑤いじめ等の予防・早期発見・解決⑥読書指導の充実⑦教育環境の整備に取り組んでいる。また、一事徹底として、「返事と気持ちよいあいさつ」を推進している。



(二) 健やかな体の育成

保健・安全・体育指導を充実させ、生徒一人一人の気力・体力の向上を目指して、①基本的な生活習慣の確立②保健指導の充実③安全指導の充実④給食指導の充実⑤食育の推進



(三) 確かな学力の定着

学習意欲の向上による基礎学力の定着を図り、将来の目標を決め、目標実現のために努力し、主体的に進路選択のできる生徒の育成を目指して、①基礎学力の定着②ICT推進③授業への心構え④五か条の指導⑤個別指導の充実⑥学業指導の徹底⑦進路指導の充実⑧キャリア教育の推進⑨家庭学習の充実⑩「マイゴールチャレンジ」に取り組んでいる。また、一校一改善として、「表現力の育成」に取り組んでいる。

四 おわりに

本校は、特色ある教育として、郷土のよさを生かした教育(自然・文化など)や小中連携教育(合同研修)、情操豊かな環境づくりに取り組んでいる。今年度は、「学習者主体の授業」実現プロジェクトの指定を受け、小宿小学校と知根小学校とともに、授業改善及び学力向上に取り組んでいる。



一人一人が輝く上場小の特色ある教育活動

上場小(始伊) 中島 保男

一 はじめに

本校は、湧水町の南部の山間部に位置し、田畑が広がり、四方を山に囲まれた自然豊かな環境の中にある。明治四十二年に創立され、今年で創立百十六年目を迎える歴史と伝統ある学校である。児童数は十九名の極小規模校で、複式三学級、特別支援学級二学級の計五学級である。

学校教育目標は、「豊かな心で、創造性に富み、たくましい上場の子を育む」である。「明るく」「正しく」「たくましく」の校訓の下、家庭や地域と連携しながら、特色ある教育活動の充実に向けて取り組んでいる。

二 取組の実際

本校では、生活科や総合的な学習の時間等で地域の自然や文化を学び、ふるさとに誇りをもつ教育を推進している。また、近隣の学校との交流学习や集合学習、大学生との異年齢交流等を通して、多様な集団の中で自己を見つめ直し、温かな人間関係を築き、自主性や社会性を育む実践に努めている。

(一) 地域の特性や自然を生かした体験活動
学校農園でのサツマイモの苗植えから収穫までの栽培活動、地域の方が所有する農

園でのブルーベリー収穫体験、地域の歴史や史跡調査等の体験活動に取り組んでいる。これらの様々な体験活動では地域の専門家の方々をゲストティーチャーとして招聘し、詳しく教えていただくことで地域の自然について理解を深め、郷土への愛着を高めている。

(二) 指導形態の工夫

町内の近隣の学校との交流学习や集合学習を毎年一回実施している。交流学习は、普段、体験できない多人数での授業で、多様な意見や考え方に触れたり、一緒に活動したりする貴重な学びの機会となつている。また、集合学習は、複式学級の教師が協力して各学年単式の授業形態で行っており、教師の専門性や個性を生かした魅力ある授業を行っている。子どもたちは、交流学习や集合学習で、集団の中で学び合う喜びや楽しさを味わっている。

(三) 大学生との異年齢交流

鹿児島国際大学生との交流を年五回、計画的に実施している。大学生が企画したレクリエーションで楽しんだり、大学生に運動会の係や選手として参加してもらったり

して交流を深めている。年齢が近い大学生との交流は、親近感がわくため、お互いに積極的に関わりあうとし、活動の楽しさを実感する経験から社会性を育むことにつながっている。

(四) 伝統芸能の継承活動

校区には四つの集落があり、二つの集落では伝統芸能(かまん手踊り、建築踊り)が伝承されてきている。しかし、過疎化・少子化の影響で、伝承活動が年々難しくなってきた。そこで、学校と上場地区芸能保存会が連携して、継承活動に取り組んでいる。それぞれの集落から隔年毎に伝統芸能に携わる方々を招き、踊り方や掛け声等の実技指導してもらっている。例年、地域との合同運動会で披露しているが、昨年は町の文化祭にも出演して好評を得た。上場地区に伝わる伝統芸能を絶やさないように、あらゆる機会を通じて、伝統芸能の理解を一層深め、継承の機運を高めていきたい。

三 おわりに

毎朝校門前で、登校する子どもたちを迎えるのが私の一日の始まりである。「おはようございます。」という子どもたちの元気な挨拶は、校区全体を明るくしている。

保護者や地域の方々の学校に対する関心は高く、協力的である。今後も家庭・地域との連携を密にしながら、地域の自然環境や伝統文化などの地域の教育資源を活用し、一人一人が輝く上場小の特色ある教育活動を推進していきたい。



大隅地区で唯一英語コースをもつ本校

志布志高 松崎 浩隆

一 はじめに

志布志高校は、今年創立百十五年目を迎える。本県屈指の歴史と伝統を有する学校である。また、曾於地区を代表する進学校としての歴史も古く、卒業生数は二万人を超える。そんな本校は、平成三年に英語科四十人を新設したが、時代の変遷とともに、平成二十三年に募集停止をしている。しかし、グローバル世界が叫ばれている昨今の状況を鑑み、現在まで大隅地区で唯一英語コースをもつ学校として十三年目を迎え、その間多くの有為な人材を世に送り出してきた。そこで、本校英語コースの特色ある取組の一端を紹介する。

二 特色ある教育活動

(一) サマーカーンプ

毎年夏休みに、二泊三日の日程で実施している。場所は、国立大隅青少年自然の家をお借りし、生徒たちも楽しみにしているプログラムである。今年も、十七人の生徒が参加した。近隣の高校に配置されているALTにも協力依頼をし、三人のネイティブと、どっぴり英語漬けの三日間を過ごす。プログラムの中身は、アイスブレイク、チ

ームゲーム、ビデオ鑑賞、デイベートコンテスト、ボールゲーム、スキット、シヨッピングアクティビティ等、盛りだくさんの内容である。生徒たちは、最初は不安な中でスタートするが、三日目にもなると、名残惜しい気持ちを表明するから、なんとも企画冥利に尽きる行事だと思っている。目的は二つある。一つめが、英語による積極的なコミュニケーションを通して、実践的英語力の向上を図ることである。もう一つは、英語コース内の親睦と、団結力の強化である。次に実施後の生徒の感想を紹介する。

① 英語が苦手な人も、得意な人も、楽しむことができるのがこのサマーカーンプ

でした。楽しいプログラムばかりで、英語力が上がっていくのを実感できました。とても楽しいので是非体験してほしいです。

② ALTの先生方とたくさん会話することで、英語力アップはもちろん、外国文化等の様々な生活様式も知ることができ、とても成長できる三日間でした。

こうした感想が沢山見受けられることから、所期の目的は大いに達成されている教育活動であると確信している。

(二) かごしまグローバルクラスルーム事業

県教育委員会が主催する今年で三年目の事業である。機器アストやオリエンテーションを含め、二学期に五回にわたって海外のインターナショナルスクールとオンライン交流を実施し、交流生の一人を交流先(海外)へ派遣する。一昨年に経験済みであったため、ダメ元で今年は手を挙げたのだが、幸いにも希望どおりベトナムとの交流が決定した。一昨年は台湾との交流を行い、生徒たちが充実した体験を行っていたので、今年は積極的に応募したところである。一昨年の生徒たちは、交流後も定期的にやりとりをしている様子で、改めて生徒たちのバイタリティなるものに、担当教員共々感心させられたところである。生徒が刺激を受け、今後グローバルなステージで輝くきっかけになる教育活動であると、今年の交流にも大いに期待しているところである。

三 おわりに

子どもが輝くのはどんなときなのか。それは、子どもが物事にワクワクしながら、自分の意思で向き合っているときと考える。そのときに感じる高揚感が、何物にも代えがたい、子どもが一層伸びようとしているときと言える。そのために、教員が場をお膳立てしてあげることも、時に必要になってくる。子どもの成長を期す教育活動には、間違いなく教員の大きな支えも必要になると感じている。

心に残るひまわり



言葉に責任を持つこと

米ノ津小(北) 中島 伸一郎

これまで私は、教師として、どれだけの言葉
を子供にかけてきただろうか。教職を三十年も
続けてきたのだから相当の数であるのは間違
ないだろう。しかし、その言葉の多くは記憶の
外にある。その時々「よいこと言ったかも」「強
く言い過ぎたかな」と思うことはあったら
うが、今、忘れてしまっているのなら、それら
の言葉は、その場での思い付きでしかない。我
ながら情けない限りである。そんな私に、ある
教え子からの一言で気付かされたことがある。

かつて勤務した学校で担任をした数名の教え
子と会う機会があった。「先生は一番厳しかつ
た。」「だから、先生の後の先生たちは楽だつた
よね。」など、私の未熟な指導を思い出しなが
ら、でも笑って話してくれた教え子たち。私は苦笑

いしながら、実は冷や汗をかきながら会話に
関わっていた。しばらくして、ある教え子と二人
で話をしていると、その教え子が、こう言っ
たのだ。「先生は、『真面目は才能。誰もが真
面目に頑張れるわけではない。』と、言ってく
れました。私はその言葉を心に留めて、夢に向
かって頑張っています。」

確かに私が言いそうなことだが、この子に
対して言ったのだろうか。真面目でコツコツ
努力できる子だったので、きつとそう言っ
たのだろ。うが思い出せない。「そんなこと
言ったかなあ。」と、とほけたように答
えて様子を見てみると、笑顔で頷いている。

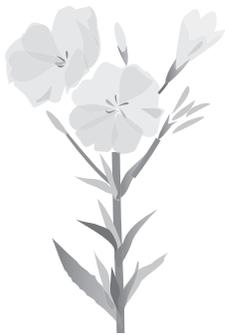
言葉に責任を持たなければならぬ。教師は、
多くの子供たちと関わる中で、多くの言葉
を交わす。前述の教え子への言葉は、幸い
プラスに働いたようだ。しかし、私の言葉
の全てが子供の心に響き、前向きにさせ
るものであったらうか。子供を傷つけ、
後ろ向きにさせた言葉が絶対にあつた
はずだ。ただ忘れていただけなのだ。気
を付けよう、言葉を選ぼう。個々の子
供に合った言葉掛けをしよう。そう思
わせてくれた教え子に感謝である。

言葉の力

吾平小(隅) 仲村 智博

振り返ってみると、幾つか私を支えてくれた
言葉が浮かんでくる。中学二・三年の担任であ
った国語の先生からの言葉である。国語を苦
手としていた私に、よく「本を読みなさい。」
という言葉があつた。確かに私は幼い頃から、
あまり本を読んだことがなかった。中学校に入
り、読んだのは「怪盗ルパン」のシリーズくらい
だ。高校に入り、読む力が付いていない私は、
国語、特に現代文の点数が酷く、かなり焦つ
ていた。その時、思い出したのが「本を読みな
さい。」だった。この言葉を思い出した私は、
寝る前の一時間、ほぼ毎日、物語や小説の本を
手に入れ読んだ。三か月、半年、とにかく続
けた。すると一年後、不思議と国語の点数が
上がり、読むことも苦にならなくなつてきた。
有り難い言葉であつた。その経験から、大学
時代、教員になつてからも本を読む大切さ
を意識し、書にふれるとともに、子供たち
へ読書の勧めを発信し続けている。

二つめの言葉は新規採用の時である。校内
で初任者研修を受ける初日のことであつた。
教室から慌ただしく向かい、指導教員の前
で挨拶を終えて席に座つた時のことであつ
た。指導教員から「仲村先生は、教員に向
いてる。」とニコリしながらも真顔で言
ってくださった。



その時は、あまり気に留めなかったが、事あるごとに、その言葉を思い出すようになった。「自分は教員に向いている」。経験を重ね、各主任を経験し、教頭時代、そして校長である今でも、その言葉を思い出す。予期せぬ件で対応に苦慮している時、逆に成果が出た時など、その言葉が脳裏によみがえる。

言葉の力、何気なく掛けられたひとことが、人に与える影響力の大きさを、改めて実感している。人として校長として、心に残るひとことを掛けられているのかどうか、今度は自分自身の番である。



信は力なり

南指宿中(南) 川 畑 哲 也

私の自宅に一枚の色紙が飾ってある。

「川畑先生へ 信は力なり 子供たちに夢を語る教師でありたい!! 山口良治」これは、縁あっていただいたもので、私の宝物である。

山口良治先生は、ラグビー元日本代表であり、京都市立伏見工業高校ラグビー部監督として全国優勝を果たした名監督である。

♪愛は奇蹟を信じる力よ 孤独が魂 閉じ込めても・・・♪

一九八四年に放送された「スクール☆ウォーズ」のドラマ主題歌となった麻倉未稀さんが歌うヒーローの歌詞である。この曲が流れると、今でも胸が熱くなる。

このドラマは、山口良治先生をモデルとしており、毎週土曜日に放送された。当時私は大学生で、寮生活をしており、毎週土曜日になると、友人らと部屋に集まり、涙を流しながらみていた記憶がある。ドラマの中では、「相手を信じ 待ち 許す」という中学校時代の野球部恩師の言葉がよく登場する。一九八八年旬報社から発行された山口良治著「信は力なり 可能性の限界に挑む」では、野球部恩師の藤井淳一先生が、体育教師を目指した時の理想の教師像だったとしている。藤井先生が、「相手を信じ 待ち 許す」という言葉を掛けていたということとは、この本では書かれていないが、私の中では、この言葉が心に強く残り続け、教師としてスタートした自身の土台となった。教員生活がスタートし、多くの先輩方から、様々な言葉を掛けられ、成長することができた。思春期にある子供たちに対して、何度失敗しても粘り強く指導を続け、夢を持つことの大切さと、それに向けて頑張ることがどんなに価値あるものかを伝えることに心掛けてきた。「信」とは、「他の意に任せろ」という意味もあるそうである。相手に任せるための準備をどれだけしたのが大事である。相手を信じるために、自分ができることは何かを常に考えることが必要である。信は力なり、子供たちに夢を語る教師でありたい。

失敗と成長

鹿児島工業高 田 中 耕 一 郎

「人生に失敗はつきものだ。」と、よく言われます。しかし、いざ失敗すると心が落ち込み、しばらくは何に対しても意欲が湧かないものです。仕事でもスポーツでも失敗しないことがあるのだろうかと思うくらい、これまで失敗の連続でした。そして、よく怒られました。時には怒られていることに納得できず、反省も十分でなかったこともあったように思います。自分の未熟さを思うと恥ずかしい限りです。

人間の成長に失敗は欠かせないものです。(もちろん、失敗してはならないものもあります)そのことは十分理解していても、失敗を恐れる

あまり、思い切った取組を躊躇してしまい、結果的に思うような成果が出ず、やらなかったことを後悔してしまうこともあります。教頭の頃、校務を上手くさばけず失敗ばかりして落ち込んでいる私の姿を見て、当時の校長先生が、「失敗したり、怒られたりしたときは、『ただいま、成長中』と思いなさい。」と、言葉を掛けてくださいました。成長という言葉は、次はもっと上手にできる自分になれそうで、落ち込んでいた気持ちを少し前向きにしてくれました。自分の成長を信じ、次から次にやってくる仕事に向き合いながら、気持ちの整理を付けることができた有り難い言葉でした。

今でも毎日失敗の連続です。全校朝礼の話が上手く生徒に伝わらなかったり、刊行物の文章が稚拙すぎて恥ずかしかったり、挙げればきりがありません。それでもその都度、「ただいま、成長中」と思い、自分を励ましていますが、本当は、そんなに成長していないのかも知れません。

最近、学校運営上の難しい課題も多く、対応に悩むこともあります。その時も「ただいま、成長中」と心を落ち着かせ、対応するようになっています。これからも成長することを目指し、この言葉を大切にしていきたいと思っています。

ある日の校長講話



校長先生から二つの指令

～今年の一学期の終業式にて～

下水流小(北) 中 熊 信 仁

この暑さでの熱中症、大雨での登下校中の事故、悲しい水の事故…。そんな心配の中、大きな事故なく、二百十六人の子どもたち、二十三人の先生方全員で終業式を迎えられたこと、まずはみんな喜び合いましょ。(拍手)

でも、大きな事故はなかったけれど、小さな事故はたくさんあったでしょう。登校の時に転んで膝をすりむいた。プールで転んで打撲など。

こんな法則があります(ハイインリッヒの法則の図を示す)。一件の重大な事故(命を落とすような事故)の後ろには、二十九件の軽い事故

(登下校中に転んでけがなど)が隠れています。さらに、その後ろには事故にならなかったけれど、「おっと危ない!」とヒヤリ、ハッとした状況(車が目の前に飛び出してきたなど)が三百件隠れていると言われています。夏休みは近くに助けてくれる先生はいません。家の人もずっと一緒ではありません。さっきの法則で考えると、「ヒヤリ、ハツと」をいかに減らしていくかが大切です。ということで、校長先生からの指令①「自分の命を、命をかけて守りなさい!」

次に、世界で活躍している日本人と言えば、大谷翔平選手。そんな大谷選手が高校時代に考え実行していたことが残されています(大谷選手が作ったマンガラチャートを示す)。

真ん中に「ドラム 八球団」という目標。そのために必要なことは、「体づくり」「メンタル」など八つ。そのうちの二つに校長先生は注目しました。「人間性」です。では、その「人間性」を高めるために必要なことは何か。「礼儀」や「思いやり」に加えて、「計画性」、「継続力」が入っているのです。これを、今のみんなに言い換えると、「勉強・遊び・スポーツ・読書などの計画を自分で立てて、毎日楽しんで続けること」です。

そうすれば、大谷選手のようなすごい成長を遂げるかも。ということで校長先生からの指令②「長い夏休み、計画性と継続力、そして楽しむ気持ちを忘れずに！」
それではよい夏休みを！

私たちは助け合える生き物

陵南小(始伊) 深川 光 久

今日は、私たち人間は助け合える生き物なんだよというお話をします。

私たち人類のご先祖様は、アフリカから始まり、豊かな森の木の上で木の実を食べて生きていました。しかし、約二千万年前、大きな地震が起こり、温かい気候はすっかり変わってしまい、木は枯れ、森は徐々になくなってきました。ご先祖様は、木の実がなくなり、木から下りて木の実を探さなければならなくなりました。離れた場所の木の実を探らなければなりません。それで、二本足で歩けるようになりました。木から下りて草原に出ると、ライオンや豹などの危険な生き物がいっぱいいます。ご先祖様も一人ではライオンや豹にはかえません。それ

で、ご先祖様たちは、みんなで協力して身を守ることにしました。その後、自分たちから獲物を追いかけて、みんなで取り囲み、合図でみんなで襲います。そして、捕った獲物の肉をみんなで分けました。こうして、木の実だけではなく、肉も食べるようになり、人間の脳は大きく成長し賢くなつていったそうです。

長い間に様々な人類が現れ、消えていきました。その中で有名なのが、私たちのご先祖様のホモサピエンスとネアンデルタール人です。私たちがご先祖様ホモサピエンスは、痩せていて小さな体です。しかし、ネアンデルタール人は、大きくて、力強い体をしています。体の大きさや強さでは、ネアンデルタール人が生き残りそうですね。でも、生き残ったのは私たちのご先祖様ホモサピエンスだったのです。ネアンデルタール人は、家族や親戚などの少人数で生活していました。しかし、ご先祖様ホモサピエンスは、百人以上の人数で生活をしていたので。そのため、たくさんいる仲間たちの誰かが知恵を出し、新しい道具や武器を発明すると、みんなですべてを使い、生き残ったそうです。私たち人類のご先祖様は、様々な危機をみんなですべて助け合うことによって生き延び、進化してきたのです。

私たちは皆、助け合って生き延びた種類の子

孫なのです。だから、私たちは誰もが助け合う力を持っているのです。みんなで助け合って楽しい学校にしていきたいと思います。

六年生は縁の下の力もち

香月小(隅) 村 岡 和 志

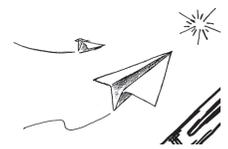
令和六年度が本格的に始まりました。新学期は学年が一つずつ上がって、新しいお友達、新しい先生、新しい教室、そして新しい自分との出会いがあります。毎日がドキドキ、ワクワクして、なんだか落ち着かない気持ちの人もいると思いますが、少しずつ慣れてきます。安心したいと思います。新学期が始まって十日間ぐらいたちましたが、どの学年も、教室の様子を見ると、一生懸命勉強したり、友達と協力して仕事をしたりしていて、頑張っているなと思います。さて、「縁の下の力もち」という言葉があります。縁の下というのは、床の下のことです。昔の日本の家は床の下と地面の間が空いています。床の下で家を支えているのが見えました。今の家は床の下が外から見えませんが、床を張る前は、木の柱が敷き詰めてあったりコンク

リートが流されていたり棒で支えられていたりします。

「縁の下の力もち」というのは、床の下の支えのように、人の目につかない陰で、他の人のために支える苦勞をしたり、努力をしたりすることを言います。学校の中で一番の「縁の下の力もち」は六年生だと思います。例えば、四月八日、始業式や入学式がありました。六年生はその三日前の五日に登校し、一年生の教室を飾ったり入学式の準備をしたり、学校中を行き来して、二年生から六年生までの教室に机や椅子を運んだりしました。そうやって新学期が始まる準備をしました。これから一年間、六年生はいろいろな行事のため、皆さんのために、見えないところで働いてくれています。六年生の皆さん、これからもよろしく願います。一年生から五年生はそんな六年生の存在を知って、ありがたいの気持ちをもってください。そして自分が六年生になったときには、皆さんが縁の下の力もちとして学校のために力を発揮してくださいね。



話のひろば



植物は人の足音を

聞いて育つ

大隅北小(隅)

原田 千鶴子

離島に赴任した際、いろいろな校務分掌を経験することができた。

なかでも緑化係は初めて任された仕事

だった。それまでは、係から言われるまま、土づくりをし、成長した苗を植えて花が咲くのを待っていた。しかし、係になった以上、中心となって計画を立てたり、苗づくりをしたりしなければならぬ。植物との関わりは好きだったが、学校全体の花の管理に携わることには大きな責任を感じた。

まずは、種蒔きの仕方を勉強することから始めた。幸いにも管理職の先生に一から教えていただくことができた。

種蒔きからのスタート。成長した苗は当たり前ではない。種の大きさも違うが蒔き方も違う。教えられたとおりすじ状のくぼみに、一粒一粒

丁寧に蒔いていく作業は、体験して初めて分かる大変さだった。ようやく蒔き終わり、後は芽が出るのを待つばかりだと思っていると、「昔から『植物は人の足音を聞いて育つ。』と言うんですよ。」と、教えていただいた。足を運んで生長の様子を確かめたり、手間をかけたたりすることで育つ。常に気にかけて、日々変わっていく様子に対応することが必要だというのだ。植物と対話をするよう生長を見守り続けていくことの大切さを昔の人は知っていたのだろう。「育てる」ことを表現したなんと奥深い言葉だろうと、感銘を受けた。それからは、毎日様子を見に行つて生長を観察し、水や肥料を与え、世話を続けることでようやく苗にすることができた。発芽しない、うまく育たないという失敗もあったが、関わりが深くなるほど、花を付けるのがより楽しみになった。緑化係を通して学んだ経験は、私の財産の一つとなった。

私たちは、子どもたちの成長に関わっている。心豊かでたくましい子どもの育成を目指し、日々、一人一人に目を配り、気を配り、心を配りながら、何か気になるときには適切な支援や手立てを行う。時には、じっと待つことも必要だろう。子どもの成長を見守り、必要な環境を整えることが、「足音を聞いて育てる」ということなのかもしれない。

中庸の徳

市来中(日)

森 雄 二

ドライブやツーリー

ングを趣味にしてい

る方々がいる。私も

通勤に使っている軽

自動車ではあるが、

運転して行楽に出かけるのは楽しみである。二輪は免許もなく当然所有もしていないが、颯爽と操縦しているのを見かけると、羨ましく思っている。

だいぶ昔のことではあるが、運転の魅力を考えてことがある。四輪や二輪を運転し、移動している時に、大量の情報が人間の感覚器官に飛び込んでくることに考えが及んだ。進行方向前方の景色が左右に流れるように変化する視覚情報。エンジンから発せられる排気や車体が走行する際の聴覚情報。ハンドルから手に伝わる路面の反力や身体とシートとの間で感じる加速・減速の際の荷重の変化。好みによっては音楽や最近ではナビゲーターの音声案内という聴覚情報も加わる。そのような情報過多の状況で運転操作にのめり込んで集中している。人によって感じ方は様々で、多量の情報をストレスに感じる方もいると思うが、機械と自分の身体が一体化しているくらい運転に極度に集中しているこ

とは、脳に快楽を与えているように思えた。

同様のことが近年でも思える。それは動画サ

イトの視聴である。視聴覚情報のみであるが、

サイト内の大量の情報を次から次に渡り歩いて、

自分の興味関心がある内容に集中して閲覧

し続け、時間を忘れるくらい没頭していること

は、運転の魅力と通じることではないだろうか。

運転や動画視聴のどちらも、適度にリラック

スしながらも一つのこと集中し、その行為以

外のことが気にならない状況は、全てがうまく

いつているように感じ、気付けば時間が過ぎ、

終えた後に達成感や満足感を得られる。ただし、

罪悪感を覚える場合も起こり得る。よいことだ

けでないことも心得ておかなければならない。

法定速度を超過して運転してはならないし、時

間を浪費して、挙げ句の果てにネット依存症に

なってはならない。

何事も過不足なく調和がとれていることが大切である。学校経営に関しても、学校長として様々な意見を聞き、その上で中庸を意識した言動、実践を日々心掛けているところである。私自身に課題が多いが、生徒と地域のために尽力したい。

思いやりと優しさ

川内北中(北)

感王寺 等

学校評価の保護者

の自由記述には、目

に余る辛辣な意見が

年々増えてきた。保

護者は評価者であ

り、学校は被評価者であるとの認識なのかもしれないが、本来学校と家庭は、地域とともに子供を育てる協力者であるべきだと思う。その意味で本校の学校評価は、学校教育目標の具現化を目指す共通実践事項の家庭の取組について、自己評価する形式にしている。しかし、それにも拘わらず、全世帯の5%程度に過ぎないが、先に述べたような状況がある。

我々が新採の頃は、保護者も担任が大学を出たばかりの教師であることを分かった上で相手してくださった。子供と共に、先生も育てようとの思いがあったと感謝する。しかしながら、現在の保護者はどうだろう。新採で初めての学級担任だと分かっているにもかかわらず、理不尽とも思える意見に苦慮している職員から電話を替わると、相手が校長なので言葉も変わる。年齢の関係か、職の違うのか。校長より担任との関係性が大事であるはずなのに、その理屈が通じない。ネット社会やクレーム社会の影響な

のか、子供の言い分だけ聞いて、担任の指導に苦言を呈する方が増えた。子供を守り育てる意味を、勘違いされているように思えてならない。職員の暴言は許されないが、保護者の暴言は許容すべきなのだろうか。カスタマーハラスメントなる言葉がようやく日の目を浴びてきた。学校経営者である校長は、そのことも踏まえ対応すべきである。毎学期末の学校評価の意見に学校だけで回答してきたが、その思いは当事者には伝わらずとも、理解者を増やすためには必要だと思っている。

二年前の日本財団の十八歳意識調査で、日本の十八歳は、海外に比べ自分を大人であると思う割合が二十七%とかなり低かった。保護者の過度な愛情が子供を成長させないことの表れなのではないかと感じる。思いやりとは、万人に対して必要なものであるが、関係性の近い者には厳しさを伴った優しさも必要である。子供たちの健やかな成長のためには、子供を取り巻く大人たちの成長が必要だ。そのためにも、保護者に対し物申す校長でなければならぬ。

読書案内



■小松成美 著

虹色のチヨーク

「働く幸せを実現した町工場の奇跡」

皆与志小(市) 蓑毛 透

「人は仕事をすることで、人の役に立ちます。ほめられて、必要とされるからこそ、生きていく喜びを感じる事ができる。家や施設で保護されているだけではこうした喜びを感じることはできません。(中略) そんな彼らを毎日見つけてきた私こそ、彼らから、働く幸せ、人の役に立つ幸せを教えられたのです。」

これは、私たちが日頃授業で使っているチヨ

ークの製造会社、日本理化学工業の会長である大山泰弘さんの言葉である。この会社の社員の約七割は知的障がい者で、文字や時計が読めないなど、様々な障がいがある。しかし、それぞれの障がいの程度や理解力に応じた工夫が成され、どの社員も任された仕事に自信と誇りをもって向き合っており、今や会社にとってなくてはならない存在となっている。

社会や保護者の理解も進み、ここ数年で特別支援学級数が大幅に増加してきている。現場では、特性や感受性がそれぞれ違う複数学年の児童が入り交った状況で学習が行われている。対応を間違えるとパニックに陥り止めることができない。だからこそ一人一人の実態を細かく把握し、寄り添い、個に応じた支援を進めていくことが重要である。本校は、児童数二十八人の極々小規模校であるが、内十一人が支援学級に在籍しており、通常学級に在籍する支援の必要な児童を加えると、おおよそ五割強の児童が支援の対象となる。インクルーシブ教育が言われるようになって早十年、学校でも、一人一人の特性や障がいの状況、個々のニーズに応じた合理的配慮を行っている。大山会長は、障がい者を前に「どうしてできないんだ。」と考えるより、

「どうすればできるんだ。」と考えたと言われており、まさに今、個別最適な学びに向かい、私たち一人一人が意識改革を図るべき重要な課題ではないか。障がいの有無に関わらず、誰でも得手不得手はあるものだ。一人一人がどうやったら楽しく学ぶことができるか、常に児童一人一人としっかり向き合い、笑顔があふれる学校になるよう努めていきたい。

幻冬舎 千三百円

■北原モコットウナシ 著

アイヌもやもや

長谷小(熊)名 越 かおり

様々な人権課題がある現代、自らの学びを続ける心の持ちようをアップデートする必要がある。「人権課題を自分のこととして考え、人権を尊重した行動をとる」ことを常に意識するだけでなく、学校経営の基底として教育活動を進めていくことが、子供たちの豊かな人間性の醸成に繋がることになる。県の人権教育研究資料

「なくそう差別築こう明るい社会」には、様々な人権課題が紹介されている。どのような人権課題があるのか、また、教育活動はどのように展開すればよいのか記載されており、年度ごとの本研究資料を学校では研修に活用させていたでいる。令和六年度版の研究資料には、新たに「アイヌの人々の人権」のページが掲載されている。北海道は古くからアイヌの人たちの居住区であり、民族としての歴史や文化を持っていたが、日本の同化政策により、厳しい差別・偏見・搾取を受けてきた。今なお偏見や差別の実態があると報告されているようだ。実際、恥ずかしながら自分自身、アイヌの文化や人々の暮らしについて、不勉強であり、人権問題について考えるところまで至っていない。

そんな中、今年度本校が人権課題として「アイヌの人々」に関する学習に取り組むことになった。アイヌ文化について、資料館や研究者のHPを視聴するだけでなく、なにかとつかかりになるものはないかと求めていたところ本書に出会った。アイヌ文化について知りたかったのだが、本書には現代社会が抱える人権課題への無知・無理解・無関心とも重なる部分について書かれており、それを表現する様々な用語とも結びつけて説明されている。中でもマイクロアグレッションという、相手を傷つける意思はな

くても相手を軽視する言動については、社会に多くあふれているのではと、自分自身のこととも振り返りながら考えることだった。一つの人権課題について考えることから広い学びに繋がることを再認識することとなった。

303BOOKS 千七百六十円

■北 俊夫 著

トイレ四方山ばなし

茶花小(大)段 原 修 司

「かんじや閑所」、「こうやさん高野山」、「とうす東司」、これらはどれもある場所を示す言葉だがどこを想像されるだろうか。閑所の閑は「ひま」という意味があり、閑所はつまり、ひまなところ、その場所が「原則一人でしか入らず、手持無沙汰で暇な場所であること」から充てたそうである。もうお分かりだろうか、トイレである。なるほど、納得のいく呼び方である。本書は、呼び方一つとっても様々あることが紹介されているほか、トイレのとおりにトイレについてあらゆる観点から語

られている。トイレに関してこんなに多くの情報を一挙に得たことはこれまでにない。

国が変わればトイレ事情も変わることは、皆さんお聞き及びのことと思うが、用を足した後、の始末を紙で行っているのは、世界の三分の一程度だということを御存じだろうか。富士山の五合目以上に約六十軒ある山小屋、登山者数が制限される前、夏には一日に五千人を超える人が利用したというが、そのトイレの処理はどうしていたのか、今はどうなのか、考えてみたこともなかったが、言われてみればちよつと気になる話題が続く。考えさせられたのは災害とトイレであった。公助の観点による災害への備えの工夫や改善は、これまでの経験をもとに進められていくそう。ありがたいことだ。しかし、行政依存、他人任せでは済まない自助意識による対策について、自分自身が、また家族と一緒に考えておく必要がある。

一見教育とは直接的な結びつきを感じられないテーマ「トイレ」だが、社会学に精通する筆者ならではの視点だからおもしろい。トイレを通じた国際理解、多文化理解。トイレを切り口にして見えてくるそれぞれの地域や時代の人々の風俗や習慣、さらには環境問題、資源・エネルギー問題。そして、トイレが福祉や健康、医療など様々な課題と結びついていることなど。

社会を見渡す一視点は、生活の身近な営みにあることを実感した一冊である。

文芸社 千四百円＋税



■安藤広大 著

とにかく仕組み化

人の上に立ち続けるための思考法

城西中(市) 吉岡 一徳

校長としての役割は多岐にわたり、常に多くのプレッシャーと向き合いながら強いリーダーシップを発揮する必要がありますが、「人はそんなに強くはないのでは」と、私は感じています。そんな弱気の私が、「少しでも楽になるような本はないものか」と、思案している際に出会った本が本書になります。

本書では、組織運営を成功させるために必要な「仕組み化」の重要性が強調されています。学校のような多岐にわたる業務を管理する場では、効率的な仕組みづくりが欠かせません。著者は、日々の業務の効率化、チームのモチベー

ション維持、問題解決のアプローチなど、具体的に実践的な方法論を提供しており、すぐに役立つ内容が豊富に盛り込まれているのも本書の特徴です。

また、本書は、校長としてのリーダーシップを高めるための心構えや考え方についても詳述しています。「リーダーシップとは何か。どのように発揮すればよいのか。」具体的なケースを通じて理解を深めることができます。

さらに、短期的な成果だけでなく、長期的な視点での組織運営の重要性にも触れており、持続可能な運営が求められる学校教育にとつて、非常に重要な視点を提供しています。

校長の悩みは、直接的に指導・助言等を行える機会が制限される中、常に判断を迫られるところにもあるのではないかと思います。

ゆえに、職員を信じて、任せるためには、より効果的なリーダーシップを発揮するための工夫(仕組み化)が欠かせません。組織全体のパフォーマンスを向上させ、教師や生徒たちにとってよりよい学びの学習環境をつくり出すための必読書として、この本をお勧めします。

ダイヤモンド社 千七百六十円

私が走ることを趣味にし始めたのは、再配一年目のことだった。菜の花マラソンに出ようよ

と言う同僚の誘いに、まさに「軽いノリ」で参加した。何とかゴールへたどり着きはしたものの、へそから下が激痛に見舞われた。まるで大きな万力で下半身を締め上げられているよう、という表現でも足りないくらい。なにしろ足の指先一本一本に至るまで痛い。翌日の全校朝会で校庭に出る際、階段のきつかったこと。手すりにもたれかかり、うめき声をあげながら降りていた。

そんな痛い思いから始まったにもかかわらず、いまだに続く趣味としての走ること。その理由は、走ることが、いくつかの恩恵を私に与えてくれるからに他ならない。それらをここで記しておこうと思う。

一 経費節減

家計に大きな影響を与えないことは、趣味を長く続けていくための重要な要素である。シューズ購入に多少の出費はあるが、Tシャツ短パンなどの軽装で済む。場所代もかからない。家の周りでも旅先でも無料でできる。加えて、ジョギングしながら観光を楽しむというの、意外といいものである。ツアーで時間に追われて次々移動するよりも、じっくり楽しめるし、歩くよりも広範囲の場所に行ける。先日、初めて皇居ランを経験した。退職したら上高地をジョギングするのが夢であ

る。

二 アイディアが降りてくる。

私の走ることは、いわゆる「スロージョギング」の部類に入る。おしゃべりしながらできる程度のスピードで、景色や空気を楽しみながら走る。すると、脳に酸素がじんわり行き渡るからか、特に仕事のことを考えようと思っただけで走っているわけではない。ふとアイデアを思いつくことがある。まさに「天から降りてくる」ように。県総合教育センターで短期研修講座や土曜講座を計画するときのアイデアは、そのほとんどが走っている

走ることが私に与えてくれるもの

趣味・文芸

西田小(市)山鹿真人

ときに降りてきたものである。(こんなことを書くとき、当時の所長さんに叱られそうだが)一昔前、「ランナーズ・ハイ」という言葉がはやったが、私の場合は、このアイデアが降りてくるたびに、それに当たるのだらうと思っっている。

三 生活の切り替えスイッチになる。

マリンポート鹿兒島という施設をご存じだろうか。建設時には大きく賛否が分かれていたが、現在は大型クルーズ船が寄港できる場所として、鹿兒島のインバウンド獲得に大きく貢献している施設である。私は仕事帰りに

ここへ寄りジョギングをしている。その名のごとく海沿いにあるので、夏の時期はちょうど夕日が沈むころ、潮の香りをかきながら走っている。そうすると、昼と夜の境目に、その日一日のオンとオフを切り替える儀式という大げさだが、太陽が沈み、月が上り、昼から夜へとバトンタッチする、その通過儀礼に自分も参加しているかのような気持ちになれるのである。水色からオレンジ色、ガラス色から瑠璃色へと刻一刻変化していく中を走るのは、なかなか素敵で、普段文芸に親しめない私でも、何かしらこの感動を言葉にしたいという気持ちにさせられる。そこで、作ってしまった詩(?)がこれである。

澄み切った空の下
今日も私は走れている
オレンジ色の夕焼けが
今日も一日お疲れさまと
大きな花丸くれる中
今日も私は走れている
光と闇の境界線を

最後にもう一つ。それは、鹿兒島マラソンを走った際に、応援してくれた保護者の方がくださった称号である。

「西田小 青春代表」

こんな素敵な恩恵、他にない。感謝！

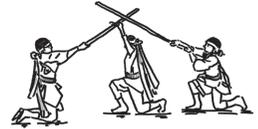
郷土の紹介

つなぐ

ふるさと教育

久志小中(大)

晶 納 晶 子



一 はじめに

「奄美の奥座敷」の異名をもつ宇検村は、奄美大島本島南部に位置し、やけうち湾を挟んで上下に連なる風光明媚な村である。久志小中学校は、やけうち湾を南西に、枝手久島の松の緑を眼前にした宇検、久志、生勝の三集落からなる。校区は温暖な気候で、校区の人々は学校に大変協力的で、子供たちを全員で育てるという理念をもっている。また、教育活動の協力隊としても力を注いでく



ださっている。

小学生十五人、中学生九人の合計二十四人の小中併設校で、キャッチフレーズは、

【二人一人が主人公 きらり輝け 久志っ子】

である。小規模校だからこそできる、小規模校でなければできない、そんな小規模校のよさを生かし、郷土の歴史とよさをしっかりと継承しながら子供たちは日々学んでいる。

二 特色ある教育活動

(一) ケンムン学習

宇検にお住まいの川渕さんを講師とし、ケンムンにまつわる様々な言い伝えを教えてもらう。ケンムンが人々の様々な生活の場面に昔から関わってきたこと、ケンムンのおかげで島の豊かな自然や文化が守られてきたことなどを学ぶことで、言い伝えや島の人たちのケンムンに対する思いを感じとる。



(二) 八月踊り

「八月踊り」は、五穀豊穡や厄除けを願って行われる行事で、男女に分かれて歌詞を掛け合い唄いなら、チヂンと呼ばれる小さな太鼓のリズムに合わせて踊る。「八月踊り」には、集落によってメロディーや歌詞、踊りが少しずつ異なるというユニークな特徴もあり、男女の掛け合いや踊りを体験しながら郷土愛を確信する。

(三) 島口劇

奄美大島の方言を子供たちが大切にし、受け継いでいけるよう、島口による劇の学習を毎年行っている。例年様々な題材を扱いながら、島口の伝統を子供たちに伝えるきっかけとしている。



(四) 対馬丸〜平和学習

対馬丸事件における当時の村民の温かさを、中学生には対馬丸事件が起こった当時の日本や世界の情勢、戦況等も含めた内容まで、学習を通して伝える。毎年八月には宇検村集落で慰霊祭を実施している。児童生徒も参加し、平和学習を実施している。「平和への思いを未来へ」



これらの学習は教育課程に位置付け、講師を招き取り組んでいる。その他に、校区の大きな活動イベントとして、豊年祭が三集落ごとに八月から九月にかけて行われている。



各集落で行われる豊年祭・敬老会には、地域の児童生徒だけでなく職員も参加している。また、職員は担当集落だけではなく、どの集落へも参加している。子供たちが成長してから、故郷を思い出してくれるよう育む取組である。

今を生きる私たちは、これまでの歴史や先人の生き方を学ぶことで、勇気と正義、絆をつなげていかなければならない。久志校区には貴重な人材が多い。これからも交流を通して、ふるさとの愛着と誇りを更に深め心に残る学びを継続したい。

話すことを因数分解して おくと思いが 届きやすい。

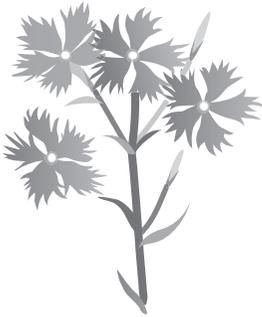
話したり文章にしたりすることは
式を展開することと似ている。



龍門司坂
© K. P. V. B

提供 「僕の贈りもの 日めくりカレンダー」

松山 武史 氏



一般財団法人校長会館だより

教育長異動

○新任 令和六年十月一日付

伊仙町 幸田 順一郎 氏

(前伊仙町立犬田布小学校長)

○再任 令和六年十月一日付

知名町 田中 幸太郎 氏

○再任 令和六年十月二十五日付

西之表市 佐藤 秀正 氏



九小協沖縄大会の様子

舞踊集団「花やから」による

アトラクション

編集後記



朝夕がようやく涼しくなり、凌ぎやすい季節となりました。熱中症対策で、思うように校庭で遊べなかった子供たちが、元気に走り回る姿を見て、ホッとすると同時に、地球温暖化がこのまま進めば、地球は一体どうなるのだろうかという未来への不安も感じます。しかし、今、私たちができることは、私たちにとって大きな希望であり、喜びだなあと、学校経営に臨んでいます。皆さんはいかがでしょう。

さて、本校では、十月を読書月間として、様々な取組を行っています。十月二十七日から始まる第七十八回読書週間。今年の標語は、「この一行に逢いにきた」です。この作者は、「本の中にグッとくる一行があって、何度も何度も目でもぞり、ついには暗記してしまおう。作者はこの一行のためにこの本を書いている。読者はこの一行に出逢うため読んでいるのだ」と思うとき、幸福になる自分があります。」読書推進協議会HPから引用」と述べています。各学校でも様々な取組をされていることだと思えます。学校では、本に触れる機会をたくさんつくっていただき、子供たちには、心に残るような一行に出会ってほしいと思います。本には人生を変えてしまうような大きな力もあります。本のもつ力を信じ、読書週間を充実させたいと思います。ちなみに私は、「鹿児島島の教育」の読書案内を読むのをとても楽しみにしております。購入の参考にさせていただきます。様々なジャンルの本を紹介していただいているので、とても参考になります。いつも感謝しています。

最後になりましたが、御多用な折、玉稿をお寄せくださった校長先生方に感謝し、厚くお礼申し上げます。

加峯 美由紀(草牟田小学校)